

第6回研究実践奨励賞

立教大学コミュニティ福祉学会 第6回「研究実践奨励賞」選考報告

研究実践奨励賞選考委員会 権 安理

第6回「研究実践奨励賞」、通称「まなびあい賞」は以下の2作品に決定致しました。

- 1) 伊勢川眞由氏 (コミュニティ政策学科4年〔掲載時〕、コミュニティ政策学科2020年卒業)
「コミュニティ福祉学部での学び」〔エッセイ〕
- 2) 富吉貴浩氏 (コミュニティ福祉学科2003年卒業)
「再び学ぶこと」〔リレーメッセージ〕

以下、同賞の趣旨を再確認した上で、今回の選考体制及び選考過程、受賞作品の講評などを報告致します。

1. 「研究実践奨励賞」の趣旨

「研究実践奨励賞」(まなびあい賞)は、コミュニティ福祉学会の学会誌である『まなびあい』に掲載された作品のうち、コミュニティ福祉学部の学部生、大学院生、卒業生、修了生などによるものの中から特に優れたものを選び、表彰して奨励するものです。また、そのことを通じて、『まなびあい』を多くの人に読んで頂き、卒業生、修了生と在学生の交流をより一層深めるために設けられたものです。

2. 選考体制及び選考過程

2020年6月13日(土)に開催された選考委員会において、選考対象となる作品(第12号掲載の2作品)について、受賞作の真摯な検討がなされました。選考の詳細は以下の通りです。

【選考基準】

例年の選考基準となっているのは以下の2点です。第一に、研究論文については、学術論文としての完成度に囚われるのではなく、多少粗削りな作品であったとしても、潜在的な発展可能性を実感させるものであること。第二に、実践記録・報告やエッセイなどについては、「コミュニティ福祉学部のマインド」を実践していることについて、支持や共感ができるものであること。ただし今回は、対象作品に研究論文がなかったため、基本的には後者を参考にしました。

【選考体制】

選考委員会の構成者は、まなびあい運営委員会のメンバーと、選考の公平性を担保

するために招聘された外部選考委員1名です。外部選考委員は、スポーツウエルネス学科の奇二正彦先生に依頼しました。

【選考対象作品と結果】

選考の対象となった作品は、『まなびあい』第12号（2019年10月31日発行）に掲載されている内の2作品（学生が執筆したエッセイ、卒業生が執筆したりレメッセージ）です。選考委員会の開催に先立って、教員から配布していた「推薦書」（主に在学生に依頼し提出されたもの）を集計して、その結果をふまえて議論をしました。

まず、各選考委員が受賞にふさわしいと考える作品とその理由を報告していきましたが、その際、受賞作を1つにするのか、あるいは2作品ともに受賞作とするのかについても議論がありました。その結果、両者に対して複数の推薦があって甲乙をつけ難かったことや、双方を受賞作とすべきとの意見も複数あったことから、今回は、伊勢川氏と富吉氏の2作品を受賞作とすることが決定致しました。

3. 受賞作品の講評

- 1) 伊勢川真由氏著「コミュニティ福祉学部での学び」について。この作品は表題のとおり、自らのコミ福での学びを、授業とゼミ、復興支援活動、留学という観点から振り返ったものです。また同時に、コミ福の後輩に対して、学びのヒントを与えたいという関心から書かれている作品です。特に評価された点は、学内での学びと学外での活動を端緒としながらコミュニティについて考えていることや、コミ福でローカルとグローバルの双方の視座を養うことができた点を実体験から語っていることです。また、柔らかい文体である一方で、コミ福で学ぶ理想（自己のスキルアップや社会への眼差し）がしっかりと書かれている点が優れているとの意見もありました。
- 2) 富吉貴浩氏著「再び学ぶこと」について。この作品は、卒業後の人生について語った作品で、コミ福での学びをどう生かしていったのかという体験や、学び直しの意義について言及しています。特に評価された点は、卒業後の人生経験が持つ読者への影響力の大きさです。また、推薦書においては、「文章力」と「感動・共感」の項目の数値が非常に高かったことも特徴的で、多くの学生に読んでもらいたいという声がありました。さらに、「若いうちは会社や社会の全体像を見る機会は少ない人の方が多い…」といった筆者の文章を引用しているコメントが複数あり、その印象的な言葉、フレーズも評価されていました。

4. 結語

今回は、対象作品が2つで、結果として受賞作品も2つとなりました。選考委員会では、あくまで賞なので1つを選抜すべきという意見も出ており、対象となる多くの作品を執筆して頂くことは今後の課題です。貴重な対象作品となった2作品は、具体的な体験や学びの経験が学生の参考になる点で大いに評価され、また、選考委員会の意見と学生の推薦書（アンケート）の結果を合わせると票がほぼ互角であったことから、2点が受賞作となりました。伊勢川さん、富吉さん、受賞おめでとございます。